伊奈波神社の神職、塩谷氏のこと

筧　真理子
（岐阜市歴史博物館学芸員）

江戸時代には、伊奈波神社の神職は塩谷（えんや）氏が勤めていました。神社の縁起や塩谷氏系図によると、塩谷氏と神社の関係はイニシキイリヒコノミコトの赴任地である因幡国でミコトに仕えた一族、毛里（毛利）氏にさかのぼります。

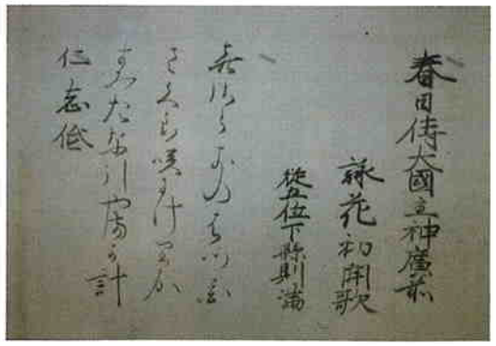
ミコトが奥州に出かけるとき、毛里倫満とその子の季満・国満兄弟を初め、因幡国の勇士が同行しました。任務を果たして金石を都に運ぶ途中で、かって同じ任務を命じられながら失敗した中臣部豊益が、ミコトの成功をねたんで景行天皇に虚偽を吹き込み、それを信じた天皇は豊益らを大将として征伐軍をミコトに差し向けました。美濃国厚見郡でその軍と向き合ったとき、降伏して都で天皇に無実の申し開きをしようとしたミコトに対して、「これは虚言を天皇が信じて派遣されたもので、しかもその虚言をなした豊益が大将なのだから、たとえ降伏しても命を助けられることはないでしょう。ミコトは武略で知られたお方なのですから、是非とも一戦すべきです」と説得したのが季満でした。季満は奮戦して豊益を討ち取り本望を果たしますが、ついに捕らえられてしまいます。多くの兵が戦死し、ミコトとその王子たちは一夜にして大きくなった山に姿を隠して戦闘が終わりました。捕虜となった季満だけは都に連れていかれましたが、景行天皇がミコトの無実を知って祀らせたとき、季満は祢宜に補されて「県」の姓を賜ったと伝えます。こうして毛里氏は神社に仕え、一三世紀に苗字を塩谷と改めたといい、『伊奈波神社略誌』には毛利倫満に始まる系図が掲載されています。その真偽を確かめることができる史料はありませんが、少なくとも江戸時代には塩谷氏が神主であったことが、断片的に残る棟札や古文書から知られます。

歴代の塩谷氏のなかで、一九世紀に神職を勤めた則満・幸満の父子は文学でも名を知られました。

則満は文政二年（一八一九）に神社境内の出雲館に生まれました。天保一〇年（一八三九）の境内絵図には参道北側、今の社務所のあたりに「神主家」があり、則満の父である塩谷好古は出雲守に任じられていますから、おそらくここが出雲館と呼ばれたのではないでしょうか。天保一二年に父の跡を継ぎ、弘化四年（一八四七）に父と同じく出雲守に任じられました。明治三年（一八七〇）に子の幸満に跡を譲り、同一〇年に亡くなりました。

則満は日本・中国の書を広く学び、俳句や和歌もよみました。写真1は、明治四四年に作成された「岐山三十六俳仙図」（岐阜市歴史博物館蔵）の中の塩谷則満（号は東岐）です。いかに

（写真1）



（写真2）

も神主らしく烏帽子（えぼし）をかぶって太刀をさし、笏（しゃく）を手に持つ威儀を正した姿で、「どちら向いて見ても小春の松の色」の一句が添えられています。絵巻の筆者である三浦雲居（一八三二～一九一二）は学校用教科書の出版に携わり、獅子門道統（各務支考の流れを汲む俳諧結社の束ね役）となった人です。俳画を得意として人気も高く、岐阜周辺にはこの人の手になる作品がかなり残されています。雲居のタッチは戯画風で人物は丸っこく描かれることが多く、また本人を前にして描いたわけではありませんから、則満が本当にこのような容貌であったかどうかはわかりません。しかし、二人は同じ時代に生きた俳人で雲居の住まいは神社のすぐ近くでしたから、少しは面影が伝えられているかもしれません。この絵巻には一七世紀末から一九世紀にかけて岐阜町周辺で活躍した三六人の俳人が選ばれています。そのなかで則満は最も遅い時代から選ばれており、当時の俳壇での重要さが推察できるでしょう。なお、これと同じ絵が岐阜市忠節町の天神神社に額として奉納されています。

また則満は、京都にあって歌壇に新風を吹き込んだ香川景樹に始まる和歌の一派「桂園派」の歌人でもありました。則満は景樹の子である景恒に和歌を学び、岐阜町周辺の同好の人たちと盛んに歌会を開きました。その場所は「いなば山花の寮」などとしるされています。また、社宝の一つである「侍大国主神広前詠花初開和歌」は、伊奈波神社境内に大国主を祀る新宮を建てたとき、則満を初めとする一二人が開きそめた桜をよんで書きしるしたものを貼り継いだ、全長約六メートルの巻物です。

この「大国主神」は今も五月一五日に例祭が行われる境内社「いなば大黒社」でしょう。写真2はその冒頭にある則満の和歌で「きさらぎのはつ花ざくら　咲きにけり　かすみたな引くやまかげにして」と書かれ